横浜善光寺留学僧育英会

育英生七人に辞令交付

「松明を掲げる人に」期待と激励

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）の第十二回育英生七人（うち一人は継続）に対する辞令交付式が二月十七日午後二時から、善光寺で開催された。

式典に先だって「釈迦殿」で、まず開山楳庵白純大和尚の年忌法要が出班焼香により厳修された。導師をつとめた駒澤大学の鈴木格禅教授は「楳・庵・白・純」の名前を頭に並べた法語を作り、「楳香馥郁海東天　庵中道得法縁圓　白雲去来擁妙石　純一家風萬古傳」と唱えた。引き続いて黒田理事長の導師により辞令交付の報告諷経が営まれた。

今回採用されたのは、スイス・ローザンヌ大学へ留学の計良龍成氏（東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程）、インド・マドラス大学ヴィシュヌ教学科博士課程に留学の三上俊弘氏（東北大学大学院文学研究科印度学仏教史学専攻博士課程）、イギリス・ケンブリッジ大学大学院社会人類学科マスターコースに留学の清水晶子氏（財団法人東方研究会専任研究員）、ドイツ・ハンブルグ大学に留学の胡建明氏（駒澤大学仏教学部禅学科＝中国人）、駒澤大学仏教学部研究員のナラダ・ラブガマ氏（スリランカ比丘）、愛知学院大学大学院仏教学仏教

史学専攻博士課程のギャナ・ラタナ・スローモン氏（バングラデシュ比丘）と継続採用された宇野恭章氏（インド・カルカッタ大学大学院博士課程）。（後に宇野氏以外の提出論文要旨を掲載）

法要後、宮本延雄理事（鶴見大学学監）が「十二回の今回は十七人の応募があり、理事会で新しく六人、継続一人の方々にお願いすることにした」と経過を報告し、育英生の簡単なプロフィルを紹介。育英生の多くがすでに現地へ赴いているため、交付式への本人出席は胡建明氏とナラダ・ラブガマ氏だけとなったが、採用を喜ぶイギリスの清水氏からのＦＡＸとインドの宇野氏からの手紙が披露された。

黒田理事長から育英生と代理の一人々々に採用証書と記念品が手渡された後、鈴木教授と東隆眞理事（駒沢女子大学学長）、善光寺の本寺である栃木県大田原市の黒田俊雄光真寺住職が、それぞれに育英生への期待と激励を込めて挨拶した。

鈴木教授は次のように語りかけた。

「猫のひたいのように狭い私の家の庭に紅梅と白梅が咲いた。そこに雪が降り注いだ情景を見て、梅は寒苦を経て初めて清香を放つという言葉を思い出した。人間が、いろんな困難、苦しみ、悲しみを乗り越えて、深い味わいをもつことに例えられている。

学問は地味で目立たない、石清水のようなものである。その学問が自分の手柄になったのではつまらない。黒田理事長は、そういうことを手柄にしろといって奨学金を出されたのではあるまい。何よりも道のためである。ドクターになることはそう困難なことではないだろう。もがき、あえぎ、うろたえて、行くべき道の見えない人たちの暗黒の魂に松明を掲げる人になりなさい。これが仏教者のもつ誓願であり、祈りである。

降三世明王図
沙門
三喜庵

学問を通して、無明に大いなる明かりをともす人になっていただきたい。それが御開山の、そしてここにおわす全ての方々の祈りに違いないと思っている」

また東理事は、日本の大学・短大における国公立と私立の割合、また私立における仏教系大学・短大の数を示し、「仏教系大学・短大の一〇％に満たない状況だが、約五十校という数は、日本に限って見られる現象であり、その影響力は決して小さいものではない」とその意義を強調。さらに「仏教は自己が自己を確認する宗教である。自己を明らかにし、自己を見つめることが肝心であり、このことを抜いて仏教はあり得ない。教育の基本も真実の人格を形成する人間教育であり、仏教と相通じている。学問は、世界の人々のために少しでも役に立たせていただくということでなくてはならない。死んだ学問ではなく、生きた学問でなくてはならない」と力説した。

また、本寺の黒田光真寺住職は「善光寺の方丈がこのような仕事をしているのも、インドからタイへ行き、長く上座部仏教の修行をし、その後、アメリカへ渡って前角博雄老師のもとで研鑽を積んだ。そういう若い時に養った国際感覚と自らの体験から育英会を作ったのではないか。その裏には平和への祈りがあると思う。平和への祈りが人間として大切なことではないか。皆が同じ地球人であるという気持で精進していただくようお願いする」と激励した。

この日は育英会の理事会も開催され、曹洞宗大本山總持寺の監院として理事に就いていた斎藤信義前監院の退任に伴い、江川辰三新監院を理事に迎えることで一致。また東理事の駒沢女子大学学長就任祝賀会の計画や、機関誌『成寿』二十六号を袈裟と愛知学院の特集号とすることなどを決めた。

横浜善光寺留学僧育英会

第12回　育英生の論文（要旨）

◇留学僧として私はこれを学びたい

中観派の空性論証――スイスでの研究計画について

計　良　龍　成

私はローザンヌ大学のティルマンズ教授の指導下で、インド仏教後期の中観派に位置するカマラシーラの主著『中観明論』を研究するためスイスへの留学を希望している。

留学中は①カマラシーラ著『中観明論』第二章「論理による空性の証明」の基礎的文献研究②カマラシーラ空性論証における論理とダルマキールティ論理学との比較研究、二点を研究する予定である。

大乗仏教初の論師として活躍したナーガールジュナの空性思想を出発点とし、一切法の空性を徹底して説く中観派は、唯識思想の台頭とディグナーガによる仏教論理学の体系の確立契機に、五～六世紀になって学派としての意識が高まる。中期中観派のバーヴィヴェーカは空性思想を積極的に論証し、大乗仏教の一学派としての地位を確立していく。後期中観派のカマラシーラもダルマキールティによって再編成された

仏教論理学と、ダルマキールティ以降の論理学研究、特にダルモーッタラのそれを基礎にして、一切法の空性論証を試みている。

カマラシーラは博覧強記の偉大な学者であり、チベット仏教の形成に大きな功績を残した実践者でもある。『中観明論』は中観思想展開史において極めて重要な書物である。私の研究は後期中観派における研究の空白を埋めることになる。それは中観派の空性論証における論理学的方法の展開を明らかにする意義を有する。カラマシーラの空性論証を研究することは、同時に空性思想における否定と否定判断を明らかにするという意義を有する。

将来は、カマラシーラの中観思想全体を解明した上で、思想史研究から思想研究に移っていきたい。

◇これからの国際交流と仏教の役割

三上俊弘

古典からの相互理解——仏教伝道のあり方にモデル

人は国境を越えて行き来している。通信や交通手段の発達は地球を狭くし、もはや地球全体を視野に入れなければ経済も政治も語れない時代になった。しかし、単に人が行き来するだけが「国際交流」という言葉に値するのであろうか。真の交流とは互いの文化を理解し合ったところで初めて可能となるものではないか。

かかる意味での国際交流が果して現在、実現されているであろうか。

互いの文化の基層を形成するものに関心を持

たずして、相互理解は果して可能であろうか。文化の基層をなすものとは古典である。ある民族の古典を知ることは、その民族の戸籍ばかりでなく履歴を知るにも等しい。残念ながら、この意味では、アジアは日本人にとって、欧米以上に遠い国になってしまった。では彼我に共通の古典はなかったのか。歴史上、アジアの過半の国が、そのもとで文化を育んできたものは確かに存在する。それが仏教である。アジアにおいて日本が真に尊敬される立場を欲するのであれば、仏教という共有財産を活かすことこそ肝要ではなかろうか。そこから本当の意味での相互理解への道が開けよう。

仏教は長い歴史の中で、力に頼んだ布教は一度たりとも行なわなかった宗教である。だからこそ、民族の固有文化の精髄にまで感化を及ぼし得たのであろう。このような仏教伝道のあり方に、私は文化交流あるいは国家交流の最も理想的なモデルを見る思いがする。

仏教が国際交流の道具なのではない。仏教こそが真の国際交流を具現してきたのだと言っても、極言ではあるまい。

◇世界平和と仏教徒の誓願

恒久平和の誓願を——同じ人間との認識が大切

清水晶子

戦争は絶対悪である。ひとたび戦争が起これば、核兵器を使用する現代戦においては、世界そのものが滅亡してしまう危険性がある。戦争は平和な世界を築き上げようとする人間の営み

を打ち砕く行為である。科学・技術がどれほど進歩しても、それを使用し、コントロールするのは人間である。人々が自分の国や民族にとらわれて、その利害のみを究極の目的に立てて、相手に譲歩する気持ちを持たない限り、行きつくところは争いであり、戦いである。

他者を思いやる気持ちから、慈悲の心が生ずる。原始仏教では、非暴力、不殺生、平和を愛する精神をもって、一切の生類に及ぶ慈悲を説いている。

私たちは国際社会の大きな連帯と影響の中で生活している。そういう状況下では、各国、各民族が思想や習慣を異にしても、同じ人間であるという認識の上に立つことが大切である。お互いに相手の立場を認めて理解し合い、異なる文化に対して寛容でなければならない。

釈尊は、人間が他人に与える精神的・道徳的な感化力を重視して、強権にたよらない社会改革を理想とした。釈尊の説いた慈悲の精神は平和を樹立するための英知である。私たちは、この精神を誇り高く掲げて、不戦・恒久平和の誓願を世界へ向けて伝えたいと思う。

◇留学僧として私はこれを学びたい

行学を後進に伝え——中国仏教復興の「火の種」

胡　建明

私は一九八九年七月二十一日、ちょうど「天安門事件」が発生した一カ月後、世間の無常を痛感し、囂喧(ごうけん)たる上海を離れて寧波の天童山に投じ、監院修祥法師に剃度を請い願

って天童山の一員になった。天童山は中国有数の禅宗名刹で、歴代に高僧が輩出し、日本曹洞宗開祖道元禅師の得法道場として世界に知られている。しかし文化大革命の劫難に洗われた天童寺は、中国の全ての仏教寺院と同様に、衰微した状態になっている。

叢林制度の乱れや人材の欠如などの難問が横たわっている。宋明時代、天童山では千五百人の僧があり、五十年前の民国時代にも五百人の僧が住んでいたが、今は五十人の僧しかいない。この不振の教勢を痛感して、私は日本に渡り、仏教を学ぼうと決意した。幸い日本曹洞宗大本山永平寺監院南澤道人老師と天童寺で会い、日本への留学を実現させていただいた。

中国は今、インド仏教の研究つまりサンスクリット語、パーリ語に基づく仏教研究は白紙の状態になっている。仏教復興の気運を盛り上げる中国にとって、インド仏教の研究は不可欠と感じる。この空白を埋めるために、私は駒澤大学を卒業してドイツへ渡り、本格的なインド仏教を学びたい。ドイツで基礎的なインド仏教学を身につけたら日本に戻り、博士論文を仕上げるつもりである。

学業を終えると永平寺僧堂に安居し、日本曹洞宗の僧侶として道元禅を学び、中日両国の架け橋になりたい。将来は中国仏教復興の「火の種」となり、異国から学んだ行学を後進に伝え、仏教のために自分を燃やしたい。

◇留学僧として私はこれを学びたい

菩薩思想を研究へ――スリランカ仏教との相違点

ナラダ・ラブガマ

私は大乗仏教における菩薩思想に注目し、「日本・スリランカ両国に浸透している大乗仏教の菩薩思想」のテーマで研究を進めていきたい。

大乗菩薩思想が発展した最も重要な国の一つに日本がある。日本に紹介された仏教は、大乗仏教および多くの儀礼的側面や哲学体系などを有した、より幅のあるコミュニオンであった。このような仏教の形態は、中央アジアや中国における価値概念や実践に繋がるものであるが、それら種々の要素を含んだ形で日本にもたらされたものである。

古代において大乗仏教がスリランカに伝播した際、大乗仏典に見られる八菩薩のうちのいくつかは、スリランカの仏教の中に入り込んだ。上座部も大乗と同様、最も高い理想として菩薩思想を受容したことは、古代セイロンの首都、アヌラーダプラのマハー・ビハーラヤ寺院に伝わるジャータカの注釈書に明確な記述が見られる。

また、四世紀のシーリサンガボーディ王をはじめ、古代セイロンの王たちは菩薩の称号を付していたことが多くの碑文や書物の中に見いだせる。マヒンダ王四世は「菩薩だけがスリランカ（セイロン）の王になれるであろう」と宣言している。さらに、二人の在家者が善行を行なって、仏陀の位に至らんことを誓願していることが、五世紀から六世紀の初めに著わされた貝葉によって知られる。

私の主要な興味は、日本の土壌に見いだされる菩薩思想の発展とその役割にある。日本で発展した菩薩思想とスリランカのそれとの相違を検討していきたい。

◇世界平和と仏教徒の誓願

ギャナ・ラタナ

十惑の根絶を実践——釈尊が平和の基盤を達成

釈尊は、道徳原理を心理学的な基盤の上に位置づけた。これが「平和」の第一の基盤である。平和を探求する人は、道義を弁えた人ではなければならない。どうすれば道義を弁えることができるのか。釈尊は「悪を止め、善を為し、心を純粋にしなさい」という。悪業は貪りと怒りと無知から生ずるものである。

人の心を純粋なものにするためには、瞑想をしなければならない。これが「平和」の第二の基盤である。

第三の「平和」の基盤は慈悲である。仏教は全ての生けるものを対象にしている。仏教の教えの基盤は、生きとし生けるものへの慈悲にある。

世界平和は、口に出して語るその心で、深く実践しなければならない。だから仏教徒は、慈悲行と瞑想の実践を通して、平和を実現しようと努力する。敵に対する慈悲行が友を生む。人が慈悲行を実践すればするほど、世界は安全で安らぎに満ちたものとなる。

仏教には二種類の瞑想がある。一つは心の安定、もう一つは法の観想である。瞑想を通して、

心の発達に根ざした内観に到達すると、人は安らぎの最終段階へ進む。苦は何かを考え、苦の起源を考え、苦の滅は何かを考え、苦の滅に至る道を考える。これが人類に対する釈尊の教えであり、世界平和の基盤である。

十惑は人を強固に緊縛する。だから人には生命やものの真実が分からない。もし人が、この十惑を根絶することができるならば、世界の平和が達成できる。